

失い、一から創った学びの場 大事なことは場所ではない

——発災直後の中学校はどのような状態でしたか？

小笠原 玄関のガラスが半分近く割れ、職員室内の物はかなり倒れていました。



小笠原 伴行さん

校舎の一番高い所に貯水タンクがあるので、配管の破損から水が全部流れ出ていて、校内は水浸しになっていました。

また、発災直後に安平町役場から物資が届いていました。体育館を避難所として開放する予定だったのだと思いますが、校内では一切水が使えず、体育館もトイレや水飲み場が使えない状況。細かい経緯はわかりませんが、避難所は開設されませんでした。体育館のダメージが大きかったことが印象に残っています。

早来中学校
当時教頭（現 苫小牧市立和光中学校教頭）
教務主任
生徒指導部長

小笠原伴行さん
石川 明子さん
高木 理さん

象に残っています。暖房用の配管が外れて、天井からもばらばらと色々な物が落ちていました。

——生徒への連絡はどのようにされたのでしょうか？

小笠原 町内の小中学校では、メール配信システムを当時からすでに利用していて、各家庭にメールで連絡ができるようになっていました。平時はこのシステムを使って臨時休校などの連絡をしています。通常は、学校のパソコンから配信システムを使用するのですが、停電のためパソコン自体が使えませんでした。緊急時も配信できるように自身の携帯電話を設定していたので、発災直後は携帯電話からメールを配信しました。

それ以外に、メールが届かない家庭や登録がまだ完了していない家庭には、非常用の電話回線を使って先生方に連絡してもらい、避難所も回って避難している生徒を確認しました。生徒全員の所在が確認できたのは地震当日の夕方でした。以後は避難所に設営された掲示板などを利用して、授業再開の連絡などをしました。

——町民センターを仮校舎にして授業を再開されましたね。

石川 地震から1週間後の9月14日に、2時間くらい授業を行いました。集会と学活です。



石川 明子さん

小笠原 当初は本校舎の教室を復旧させる準備をしていましたが、教育委員会の判断により断念しました。体育館以外にも、理科室の天井の梁のモルタルが落ちていたといった被害がありました。このモルタルがかなり重かったので、万が一のことがあると危険だと判断されたのだと思います。ですから、生徒はその後一度も校舎に入ることなく、校舎は使えなくなりました。

仮校舎の建物は、1階が避難所になっていた町民センターで、早来中学校は2階と3階を使わせていただくことになりました。仮校舎でどれくらいの間経過することになるのかわからなかったのですが、机や椅子は運ばず、町民センターの長机とパイプ椅子を使うことにしました。

高木 13日の引っ越しには、何十人というボランティアの皆さんが来てくれたんです。町民センターには黒板がありませんから、移動式の黒板やホワイトボードをかき集めて何台も運びました。



高木 理さん

——避難所と同じ建物の中ということで、気を遣われたのではないですか？

小笠原 一番気を遣ったのは、やはり音でした。生徒が活動する中で出る音もありましたし、逆に聞こえてくる音もあります。例えば隣に調理室があつて炊き出しをされていたので、その音が授業中の子どもたちへの集中力に影響しないだろうか、などという心配がありました。

もちろん避難されている方々は大変な状況にあるので、子どもたちには、休み時間に大声で話したりしないなど、避難所の皆さんに迷惑がからないように気をつけていこうと、担任の先生から呼びかけられました。



被害を受けて使用できなくなった早来中学校の旧校舎



ボランティアによる仮校舎への引っ越し

石川 町民センターは入口が1階と2階にあって、避難所の入口は1階、中学校は2階と分けて使っていましたから、交錯することはありませんでした。中には避難所から通う子もいて、その場合も内部階段ではなく、いったん外に出てから外階段を上がり、2階にある学校の入口から入っていました。また、3階の教室に入る前には上靴に履き替えるなど、気持ちの切り替えができるようにしていました。

――授業で苦勞されたことは何かありましたか？

小笠原 3階の4部屋を教室として使いましたが、3年生は2クラスだったので一番大きな部屋をアコーディオンカーテンで2つに仕切り、中くらいの部屋2つを1年生と2年生、和室を特別支援のクラスに割り当てました。

3年生の場合、1つの部屋を仕切っただけなので、それぞれの授業の音が聞こえて、先生方はやりづらかったと思います。



仮校舎で練習する吹奏楽部

電話については、町民センターの電話を頻繁にお借りするわけにはいかなかったので、ソフトバンクから被災地支援として携帯電話を貸し出しいただいて、仮設校舎ができるまでの4カ月間、保護者との連絡用などに使わせていただきました。

――生徒たちの心のケアについてはどのように対応されたのでしょうか？

小笠原 元々、月に1回程度、スクールカウンセラーの先生を学校に派遣していただ



平成31(2019)年1月から使用しているプレハブの仮設校舎

また、授業ではホワイトボードや移動式の黒板を使用しました。通常の教室にある大きな黒板と違って、子どもたちはノートが取りにくかっただろうと思います。先生方もプロジェクトで壁に映像を映すなど、色々な工夫をしていました。

石川 私が担当する数学は1クラスを二つに分けて2名の先生で教える少人数指導を行っていたんですが、仮校舎では場所がなく、それができませんでした。数学は生徒たちの理解に差が出る教科でもあるので、慣れない一斉授業で「子どもたちがうまく対応できるかな」というのが最初の心配でした。

それから、テストが長机だととてもやりにくかったですね。すぐ隣に人がいるので子どもたちも見えないように神経を使っていましたし、集中したいけれども見えてしまう範囲に隣の人がいるし、消しゴムをかけると机がガタガタ揺れて集中できないということもありました。

高木 私は保健体育が担当ですが、最初のうちは近くの早来小学校も避難所になっていたの、同じ町内にある遠浅小学校にスクールバスで移動して、体育館を借りてい

ていました。地震後は、北海道教育委員会からの緊急派遣で応援の先生にも入っていただいて、生徒へのカウンセリングの回数を増やしました。地震直後には、スクールカウンセラーの日になると、何人かの生徒が相談に来ていました。

高木 震災後の比較的早い時期にアンケートを行い、生徒の状況を見ていました。夜眠れないなど、余震も続いていたので不安感を訴える生徒が多かったですね。

「少し心配」と先生方から名前が挙がった生徒のアンケート結果はスクールカウンセラーの先生にも見ていただいて、必要と判断された場合は生徒にカウンセリングを受けてもらいました。アンケートは震災から1週間後、2週間後、1カ月後と少しずつ間隔を置いて行い、ついこの間の2年後にも実施するなど、ずっと継続しています。

――受験を控えていた3年生への影響はありましたか？

石川 最初は、勉強がどのくらい遅れるかと心配でしたが、逆に学校行事ができなくなってしまう分、授業を入れていくしかないということもあって、思ったほどの遅

ました。移動時間は15分くらいです。

本来、体育の授業は週3時間なんです。が、そんなに通うことはできないので、教室でできる保健の授業を増やしました。生徒たちが運動不足にならないか気になりましたが、体力の低下よりも、動きたいのに動けないというストレスのほうが大きかったように思います。

――電話やネット回線はどうでしたか？

小笠原 町民センターで職員室として使っていた部屋には、ネットワークの設備がありませんでした。元の校舎の職員室をできるようにしていただき、先生方が二つの職員室を行ったり来たりしていました。ほぼ毎日です。ただ、元の校舎では電気は使えるようになったら、水道が長期間使えない状況が続いたため、苦勞しました。

また、はやきた子ども園からテレビ会議システム用のタブレット端末などの機材をお借りして、元の職員室と町民センターの職員室で顔を見ながら話ができるようになりました。私自身は電話対応や管理面から元の職員室にいることが多かったのですが、このシステムはとても助かりました。

これは出ませんでした。ただ学習環境は決まっていたとは言えなかったの、やはり心配していましたね。

それでも学校祭は「何としてでもやる」と中止にはしませんでした。そのこともかなり、子どもたちが頑張る力になったのではないかと思います。

小笠原 子どもたちの意欲なども考えると、行事を全部やめて勉強ばかりというのはストレスがたまりすぎます。何を残して何を削るか、どこでストレスを発散させるか、どのように経験を積ませるか、ということについては、先生方はかなり考えて知恵を出していました。

もちろん子どもたちの頑張りもあって、地震災害時の3年生は全員志望校に入ることができました。

――部活動は続けることができたのでしょうか？

小笠原 できる限りではありませんが、続けていました。一番問題になったのは活動場所、野球部の場合は小学校のグラウンドだとサイズが小さいし、少年団の活動もあります。かといって町のグラウンドも被災

して使えないので、しっかりと活動できる場所がなかなかありませんでした。軟式テニスは2年連続で全国大会に出場していたのですが、テニスコートはこの辺にはないので隣の千歳市まで行ったり、苫小牧市の小学校の体育館を借りたりしていました。吹奏楽は室内の活動ですが音が出るので、避難所と一緒に仮校舎で行うにあたり、音の影響をできるだけ抑える工夫が必要でした。どれだけ効果があったかはわかりませんが、防火扉を閉めたり、夏でも窓を閉め切って練習をしたりしました。災害復興支援で、ポータブルのエアコンを設置していただくことができ、感謝しています。

——プレハブの仮設校舎には年が明けてから引越されたと聞きました。

小笠原 12月末に完成して、1月4日に引越をしました。何とか3学期に間に合わせたいということもあって、教育委員会をはじめ、たくさんの方々のご協力をいただき、予定通りにスタートを切ることができました。

引越しにあたっては、何を持っていくかで結構悩みました。言ってみれば、一つできませんでした。

また、全国から本当にたくさんのご支援をいただきました。生徒会や部活動を中心に呼びかけを行ってくださり、たくさんの方々から義援金や寄付、メッセージなどいただきました。今も仮設校舎の玄関には、ご支援いただいた方々を地図にまとめた「サンキューベリーマップ」を掲げています。



今も仮設校舎の玄関に掲げられている「サンキューベリーマップ」

の学校を創るのと同じです。仮設校舎が完成して「教室」というスペースは出来ても、それだけではまだ教室環境が整ったとは言えません。町民センター



仮設校舎の教室の様子

元の校舎から何を運ぶと環境が整うか。冬休みに入ってから3日間先生方に必要なものを洗い出してもらい、図面の中に全部書き込んでいただきました。仮設校舎は町民センターの仮校舎より大きいとはいえ、それでもすべての備品を運び込むことはできませんでした。引越したあとも、必要な備品を元の校舎に取りに行き、使わなくなった戻すというのを繰り返していました。

——色々な支援の中で、特に印象に残っていることは何でしょうか？

小笠原 一つは、ボランティアの皆さんで立ち上げ、運営していた「あびら未来塾」です。子どもたちの学習環境が整わない中、3年生が卒業するまでの間、子どもたちが自主学習できる場所と時間を無償で提供していただきました。塾の終了後には、使用していたタブレット端末を学校で借用させていただき、授業でも活用することが



仮設校舎の廊下。他校の生徒など様々な方々からの応援メッセージが貼られている

高木 マップ以外にも、仮設校舎には本当に色々なメッセージなどが貼られています。個人の方で、子どもたちのために「必要じゃないですか？」と文房具を送ってくださったから、ずっと支援を継続されている方もいます。

——震災から約2年が経過しました。振り返ってみていかがですか？

小笠原 学校として避難訓練は定期的に行っていたものの、今回は子どもたちが学校で活動している時に起こった災害ではありませんでした。場所や時間、季節によっても対応する状況が変わります。その時々で子どもたちが自分の命を守るための行動ができるように、様々な状況を想定して指導する必要があるのではないかと感じました。

高木 たくさんのご支援をいただいて生徒も我々もとても感謝していますが、現在もまだ被災は終わっていないというのが現実です。仮設校舎から卒業しなければならぬなど、その面で子どもたちが負い目を感じないような教育を何とかやっていきたい。「まだ終わっていないぞ」という気持ちを持って、日々努力して過ごしていきたい

と思います。

石川 特に今の3年生は1年生の途中で町民センターの仮校舎に引越し、さらに仮設校舎で過ごして、令和4(2022)年度に完成する新校舎にも移れません。その生徒たちが、前の生徒会長が言っていた「場所じゃなくて、自分たちがいることがすごく大事なんだ」という言葉のように前向きに活動していくことを、これからも願っています。

小笠原 思いもしなかった災害が起こり、その中で、子どもたちの学習環境や安全に過ごせる状況をどうやって整えられるか。先生方もそのことを第一に考え、知恵を出し合いました。それらを形にするうえで、子どもたち、家庭、地域やボランティアの方々など、多くの皆様のご協力とご支援がありました。令和4(2022)年度には小中一体型の新しい学校が完成します。これからも安平町の子どもたちが元気に学習に取り組むことができることを願っています。